

朝ドラ俳優が闘ったギラン・バレー症候群

細菌・ウイルス感染、神経障害を起こし手足まひ

風邪や胃腸炎にかかった後、まれですが、急に体がまひして動かなくなることがあります。

NHKの朝ドラ「舞いあがれ！」や「マッサン」に出演していた俳優の小堀正博さんが半年ほど前、発熱で自宅療養中、トイレへ行こうとしたら立ち上がれず、救急車で緊急入院しました。その後、呼吸をするのも難しくなり、集中治療室で治療を受けたといいます。診断は「ギラン・バレー症候群」で、4カ月半の入院を経て退院しました。ギラン・バレー症候群は何が原因で、どんな治療があるのでしょうか。

35歳の男性会社員Aさんは焼き鳥屋で食事した後、胃腸炎を起こしました。下痢は2~3日で良くなりましたが、5日ほどすると両手足に力が入らず、しびれが出ました。翌日には一人で歩けなくなり、救急車で総合病院に搬送されました。

症状と経過からギラン・バレー症候群を疑われ、入院後すぐに神経伝導速度などの検査を受けました。採血で抗ガングリオシド抗体が陽性で、免疫グロブリン療法を5日間受け、治療が終わるころには手足の筋力が回復し始めました。入院後3週目には少し筋力低下と指先のしびれが残るものの、独立歩行が可能となり、退院しました。

■発症者は加齢とともに増加

ギラン・バレー症候群の発症率は10万人に1人程度です。すべての年齢で発症しますが、加齢とともに増え、一番多いのは50~70代の中老年です。男性にやや多い病気です。

ギラン・バレー症候群は、ごく普通の感染やワクチン接種を契機に5日~3週後に左右対称の四肢の運動まひで発症する神経障害です。多くの場合、症状の進行は2週間ほどで止まり、その後回復します。運動まひのほかに時々、脳神経障害(顔面や眼球のまひ)も起き、3分の2以上の人で痛みや感覚異常が生じます。

6割ほどの人で自律神経も障害されます。この障害が重いと血圧コントロールが難しくなり、腸がまひし、排便排尿が難しくなります。さらに2割ほどの人で呼吸筋がまひし、人工呼吸器が必要になります。

死亡率は2%ほどですが、20%の人が1年後でも独立歩行が難しい状況です。発症後、働き方を変える人が3~4割います。高齢者と入院時筋力低下が強い人の予後は不良です。

原因は自己抗体です。細菌やウイルスが感染すると免疫が働き、抗体ができます。菌やウイルスの成分が人の組織と似ていると、人の体の一部を認識する自己抗体ができ、組織を障害します。

■ カンピロバクター感染で発症率 100 倍

たとえば、食中毒の原因菌の一つカンピロバクターに感染すると、神経線維を取り囲む神経鞘（しょう）に結合する自己抗体（抗ガングリオシド抗体）ができることがあります。この自己抗体が神経に結合し、障害を起こすとギラン・バレー症候群を発症します。カンピロバクターの感染で、ギラン・バレー症候群の発症率は100倍に上がります。

細菌やウイルスの感染だけでなく、インフルエンザなどのワクチン接種でも起こることがあります。新型コロナウイルスのワクチンでも起こりました。ただ、その頻度は非常にまれで、ワクチンによる感染防御のメリットの方がはるかに大きくなっています。

治療は、必要に応じて人工呼吸器や血圧コントロールなど全身管理をした上で、Aさんのように免疫グロブリン投与するか、血漿（けっしょう）交換を行います。発症後2週間以内に治療すると良い効果が期待できます。